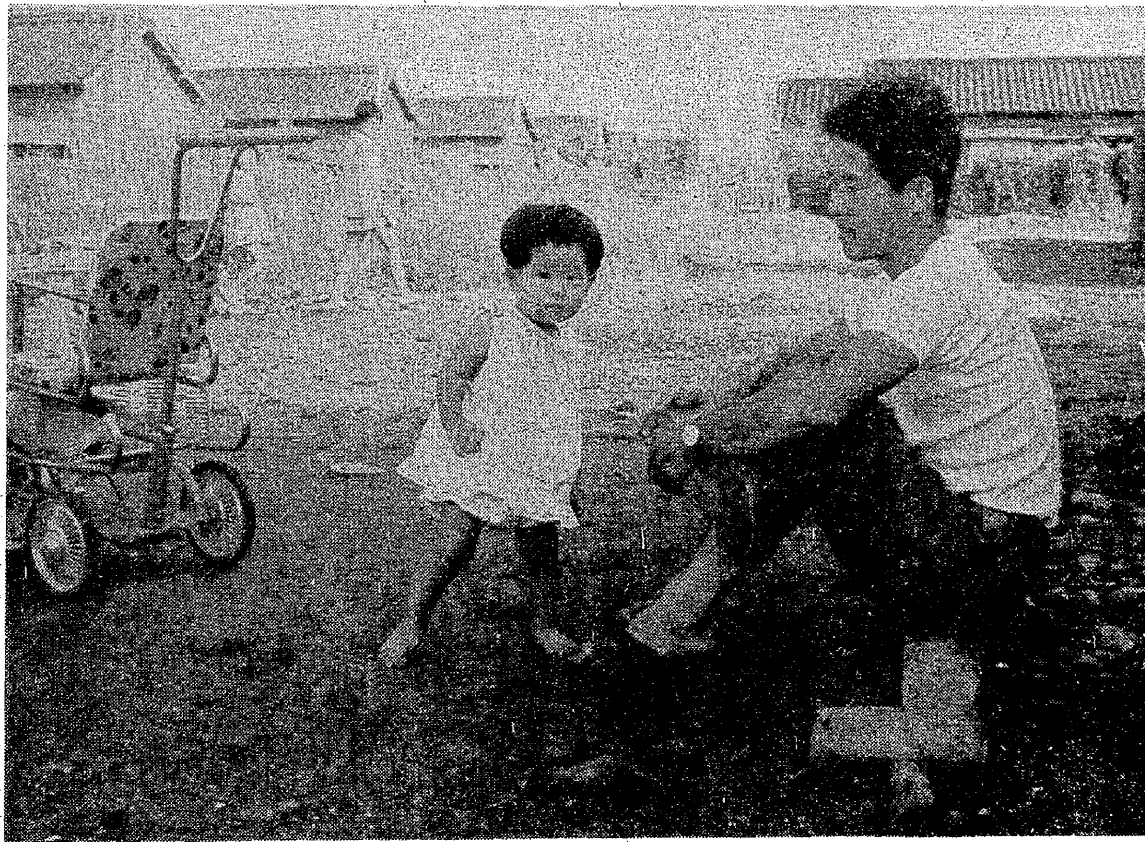


# 原告団

## 遺族・CO裁 判、災害責任 追求、特集号

第14号



よちよち歩きの泰代ちゃんと遊ぶ、若い父親の泉さん。

(この写真は、犠牲となる2-3日前に撮られたもの)



今では、立派に小学四年生の元気な子どもに育った、泉さんの遺児の泰代ちゃん。泰代ちゃんは、気丈な子どもである。一昨年の一一・九大爆発抗議集会の際、約三千人の参加者の前で、堂々と自分の作文を朗読、亡き父親にささげた。

### しあわせ

溝口富美代さんは、すでにこの世にいななくなった夫のことを、今も「泉さん」と叫ぶ。  
「泉さんは、とにかく優しい人でした。それに泉さんほど子どもを思いの父親も見たことがありません。」

二人はともともといく同志で、子どものころから親が許した許婚の間からであった。晴れて結婚したのは昭和三十六年四月十九日。ともに二十四歳のとき、泉さんの両親が住む新港町の鉾屋住宅にほど近い、新港町三十八六棟の一階に居を定め、始まった香くわしいばかりの新婚生活。  
翌一三十七年六月十九日、二人の間に女の赤ちゃん誕生。泰代と名づけられた。

親の子どもへの愛の深さを、人は「目に入れても痛くない」と表現する。泉さんがまさにその典型だった。赤ちゃんの首がまだ十分すわらないころから、泉さんは柔らかな赤ちゃんの体をあの手でオムツを替えるまきまきして安定させ、鉾から帰るなり自転車ですれまわるのが日課だったそう。  
そのすまじいこそ手せまな社宅ではあったが、いっばいしあわせに包まれていたそのころの一家をしのばすには足りない。無情にもそんな一家のしあわせを、一瞬のうちに打ち砕いてしまったものこそほかでもなく、炭じん大爆発だったのだ。

### どん底へ

「やがて、泉さんが帰ってくる。——思えば胸も自然とはずんで、ほろほろ取るのも楽しい富美代さんだった。幼い泰代ちゃんをおんぶしながら、いそいそと夕餉の仕度にかかっていたときだった。時計の針は午後三時十五分を指していた。

不気味な地揺れがしたと頭う次の瞬間、あたりの静かな空気をひ

### 遺族・溝口さんのその後

「それが何時ごろだったか、全然おぼえていません。ただ、時間のたつのが長かったことだけが、頭にこびりついています。——富美代さんは述懐する。

「今から思えば、まぼろしのようです。——富美代さんは回想するが、ともに二十六才のときのことである。

このとき、泉さんの実の弟の勇男さん(行年24才)も亡くなったが、そのことはさておき、泉さんは溝口生松さんの長男として生まれた。わが国が太平洋戦争に突入する前夜の、昭和十二年十二月二十四日のこと。うぶ声は、南海に漂うフライリップのシンダナオ島であった。

「たしか、午前十時ごろだった。——とは、生松さんの記憶。爆撃とて、昨日まで深緑だったヤングルが、今日は赤茶けた地肌に変えていった。

「たしか、午前十時ごろだった。——とは、生松さんの記憶。爆撃とて、昨日まで深緑だったヤングルが、今日は赤茶けた地肌に変えていった。

## 明日はどんな生活が

まぼろしとしか思えないあの日のこと  
一瞬にして消えたしあわせ

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

「まぼろしとしか思えないあの日のこと、一瞬にして消えたしあわせ。明日は？」

### おわび

本紙前号の記事のなかで、思わぬ手違いや不備の点が少なくなく、本紙を読んでくださった皆さん、誠に申し訳ありません。本紙の編集に携わっている方々に、大変なご迷惑をおかけする結果となりました。

何しろ、現在本紙の編集陣がほとんど一人という厳しい状態です。よほど誤りのないよう心をこめてはおりますが、思わぬ誤りをおかすことになってしまいました。紙面を借り、深くおわび致しておきます。

何といたって大きな誤りは前号四ページの記事、「真実の声に耳傾けよ」の項の「第一回公判における本田弁護士の陳述」とあるのは、「本多弁護士」とすべきところでした。また七ページの「富浦鉾屋事件、三十回公判」の記事のなかで、運送政治局長の名前を「信次郎」としたのは、「信治郎」とすべきところでした。

さらには一一・八一九一〇と続いた記号すべき行動を伝えた記事のなかで、今年から三池の闘いのなかで、かくべき重要な役割を果たしていたことになりました。大爆発

とくやしがる生松さん。補償金といえは、わずか四十万円の用慰金に、泉さんの退職金が十八万七千六百二十円だった。とまれ、富美代さんは今、ほかの遺族たちといっしょに、三井鉾山が遺族の生活対策の一助のふれこみで誘った「三池縫製工場」で、一日じゅうマシンを踏んでいる。三十六歳。まだ若いこの未亡人にとって、明日はどんな生活であり得るか。

裁判の弁護団にふれていないことも大きな手落ちでした。これからは十分注意を払ってまいりますので、今回の手違いや不備の点をお許しいただいて、本紙のためにいっそうのお力添えをお願い致しておきます。

ここに改めて、大爆発裁判勝利のために奮闘いただいた代理弁護士の諸先生をご紹介致しておきます。(敬称略)

佐伯 静治 佐伯法律事務所(東京)

藤本 正 藤本正法律事務所(東京)

角銅 立身 角銅法律事務所(福岡県田川)

齊藤 鳩彦 福岡第一法律事務所(福岡)

本多 俊之 右同  
小島 隆 右同  
(いずれも総評弁護団所属)

なお、本紙の紙面を割けず十一月八日行われた記念講演——藤本正弁護士の「労働災害と権利闘争」と、千葉茂勝弁護士の「水俣病裁判担当・熊本」の「現代の公害闘争の問題点」は、残念ながら内容紹介を割愛せざるを得ませんでした。その旨を記しておきます。

編集部